

コロナ下の登山の実相記録 2 今は「そんな時代もあったね」のまだ序盤

OWCC 中川和道 20200815

ワクチンがないのだから、コロナ禍は、まだ序盤だ。日本はまっさら。ヒト人も歩けばコロナに当たる、たちまち感染増大だ。そのうえ、熱中症の症状（発熱、だるさなど）はコロナと似ているので、医療への負担は本当に大きい。7/16 夏山連絡会で柳川さんがおっしゃったとおり、登山者には格別の注意が求められる。マスクをはずすタイミングを探そう、という呼びかけをどう実践するかについて、日本山岳ガイド協会のビデオ <https://www.youtube.com/watch?v=IHkIYagmsM> が参考になる。一見をお勧めする。六甲山ロックガーデンでの収録で、なじみも深い。「まずマスクを外しましょう」という冒頭の山本ガイドのご発言は嬉しくて衝撃的だえある。

さて、中川の地元生瀬駅はあの有名な「旧福知山線廃線敷」の入口だ。廃線敷に向かう人々を、中川はほぼ毎日見つけてきた。4月9日の緊急事態宣言のあとも、ほぼ毎日、廃線敷に向かう人々がおられた。彼らは、自粛期間中にハイキングをあえて実行したご本人たちだ。彼らは何を感じておられるようだったのか、彼らに中川はどう接したのか、その実相を書いてみよう。

4月9日の緊急事態宣言でその数はさすがに減ったもののゼロにはならなかった。馬力をもてあましておられる若者たちがまずポツポツとやってきた。電車を降りるその方々はみんなマスクだ。前50mにも後50mにも誰もいないのに、おひとりマスクの方や、マスクに身を固めたカップルだ。マスクとは、他人との不要なあつれきを避ける必須装備なのだ和中川には見えた。

中川も地元公園めぐりハイクの何回かは、廃線敷に行ってみた。木ノ元バス停から176号線を行ったり、簡易トイレ（兵庫県連がJRに申し入れて設置）を過ぎると、廃線敷入口だ。名塩川橋梁、姥ヶ懐川橋梁を過ぎる。4月5月の週末には、同じ向きに3パーティー、武田尾方面から歩いてくる向きに3パーティーくらいに出会った。平日は1パーティーくらいだ。中川は、毎回、北山第1トンネルの手前でやめる。トンネルの中は換気がなくこわいからだ。

ある週末1回だけ、北山第1トンネルの手前で、マスクをしていない若者4-5人のグループが岩に腰かけ、氣勢をあげていた。中川を見つけると「地元のうるさいジジイが文句をつけにきたのか？お前がうわさの自警団か？」とでもいいそうな雰囲気、50mくらい手前なのに、大声の話をやめて、中川をにらむ。恐れ入った。トンネルからご夫婦らしい初老のお2人が出て来られ、幸い、第3極ができた。ご夫婦は右側通行、中川は左側通行なので、衝突コースだ。中川が右側通行に移ると、お2人は遠くから会釈を返し、おだやかにすれ違う。「生き返ります」とマスク越しに話を交わす。その様子に若者グループも穏やかになり、目であいさつを交わして、その場は終わった。ほっとした。こんなことで不愉快が生じてはたまらない。えらい世の中になったものだ。

5月末まで延長された自粛期間中に廃線敷を訪れた方々の中には、何だか思いつめたような表情の方もおられた。決まって平日のことだった。よほどのストレスを晴らしに来られたのだろうか。笑いや明るさを感じられないそのご様子に、ごあいさつを中川は思わずはばかった。

以前、MLに書いたのだが、何年か前、生瀬駅で足元がおぼつかない高齢のご夫婦を見かけた。廃線敷に行くというので中川は止めようとした。電灯・携帯・水など装備は問題なく、前後に大勢の人が歩いていて晴天。ご夫婦は昔から何度も来て道はよく知っておられ、老人ホームに入ることがきまったので、その前の思い出に、と来られたらしい。中川はあんな方々まで自粛はおかしいと、今回、改めて思い返した。むしろ尊重すべきでガイドしたい。自粛すべきは3密であり、3密を避けた廃線敷ハイクはあってよい。8/13 朝日新聞：戦時中パーマ自粛動員の中、空襲の前にせめて日常をと、パーマ屋をつぶさなかった店主の心意気が、あのご夫婦に重なる。政権に始まり日本を支配し個人の尊厳を圧迫した4月5月の自粛動員、あれで正当とは中川はととも思えない。

マスクをしないで廃線敷に向かう人を初めて見たのは6月になってからだった。家族連れがどつと増えてにぎやかな笑い声が戻って、うれしかった・・・。

ところが、この感染第2波だ。またまたマスクの廃線敷に戻った。自然も廃線敷も変わらないのに、人間だけが右往左往せざるを得ない。ワクチン完了まで1年？コロナ禍は、まだ、序盤だ。